

第24回 常二備へヨ…

IT生

昨年の熊本地震に続き、その被災地に近い場所で水害が起きた。被害を大きくしたのは土砂崩れだが、地震の影響もあっただろう。

しかしながら、水害の被災地では5年前にも被害があり、同程度の犠牲者がでていた。3年前の広島土砂災害も、15年ほど前に被害があり、この時は発生は昼間だったが、「夜間に発生したらさらに被害は拡大した」と警告され、その通りになった。今回の水害でボランティアに行った人に聞くと、被災地の役所で5年前の被害の写真展をやっていた。その横で、職員が「どうしていいのかわからない」と言っていたらしい。



昭和11年の阪神大水害の被災地、神戸の甲南学園にたつ記念碑「常二備へヨ」

自然災害の被害というのは、災害の発生場所に人がいなければ起こりえない。だったら、その場所にいなければいい話だ。実際、今回の水害の被災地でも、事前にハザードマップ（被災想定地図）をみていた住民は避難している。

東日本大震災以降、災害情報や様々な防災の取り組みが盛んだ。しかし、「最新の」防災技術が喧伝されればされるほど、人々の防災意識は薄れていく。「だれかが、何かをして、助けてくれるだろう」と思うからだ。防災の基本は「その土地の被災歴を知り、被災想定を理解し、危険だと思えば、その場から立ち去る準備を日ごろからしておく」。この基本をおろそかにすると、いつまでも被害は繰り返される。日本人は歴史好きだから、知る努力はするのだが、行動を起こす段になると、とたんに反応が鈍くなる。江戸時代幕末の安政南海地震の被災記録をのこした高知の僧侶は、家財に固執するあまり、津波に流される村人を目の当たりにし、「命よりモノが大切に思うのはどうしたことだろう」と嘆いた。また、この時の被害を戯画にした「絵本大変記」には、「とどのつまりが、命あってのものだね」と後世に訓示を残している。

そうした日本人の特性？は変わらぬようだが、首都直下地震や南海トラフ地震では社会そのものが消滅する危険性があることをそろそろ肝に銘じたほうがいいだろうと近年繰り返される災害による被害をみるにつけ思うのだが。

（平成 29 年 7 月）